「日々の理科」（第 2747 号）　2022,-1,21

「イチョウ並木の紅梅」

お茶の水女子大学附属小学校教諭

お茶の水女子大学サイエンス&エデュケーションセンター研究員

田中　千尋　Chihiro Tanaka

この冬の東京は寒い。「日最低気温が 0℃未満の日」を「冬日」、「日最高気温が 0℃未満の日」を「真冬日」と呼ぶ。この冬の東京では「真冬日」こそ一回もないが、朝の気温が氷点下になる「冬日」は何回もあった。私は小石川の自宅から職場まで、自転車で５分ほどなのだが、その間に凍え切ってしまうという感じだ。特に北風の強い朝は、ちょっと辛い。

写真は職場のシンボルの一つの「イチョウ並木」である。戦前に植えられたイチョウの木々の間に、２本の梅の樹がある。附属小学校側が「紅梅」、附属高校側が「白梅」である。そのうち「紅梅」が咲き始めた。

紅梅は、レンガに囲まれた植え込みにある。決して枝ぶりの良い梅とは言えない。しかし、花の少ないこの時期、冬枯れの景色の中に咲く鮮やかな紅梅は、実に目の覚めるような印象を受ける。

このイチョウ並木は、護国寺駅方面から来る児童の通学路になっている。毎日通る子どもの一人は、紅梅の開花に気づき、「先生、イチョウ並木に赤い桜が咲いてたよ」と言っていた。「赤い桜」とはよく言ったものだが、残念ながらサクラの花とは全く似ていない。

私は植え込みの囲いに載って、花を近くで観察してみた。ウメは非常に品種が多いが、残念ながら何という品種かわからない。それにしても、こんなに寒い時期に花を咲かせても、昆虫はほとんど飛んで来ないだろう。大学構内ではメジロを見かけ、時には教室にも飛び込んで来る。このウメの花粉も、メジロが運んでいるのかも知れない。